

## 登米の昔話「すとんす」

昔々、登米に養雲寺というお寺があったどさ。それはそれは大きなお寺だったが、和尚さんと小僧さんの二人すか住んでいながったどさ。

ある日の夕方、和尚さんが「これこれ、すとんすや。この手紙持って、赤生津の香林寺さんさ行ってけろや。おそくなったら、泊まってもいいがら。」と頼みごどしだど。そして、和尚さんは、お札を持ってきて、すとんすに渡したどさ。「このお札は身代わりお札と言って、ありがたいお札じゃ。困りごどあったら、何でも頼め。」と、三枚のお札を渡したんだとさ。そすて、すとんすはでがげだどしゃ。

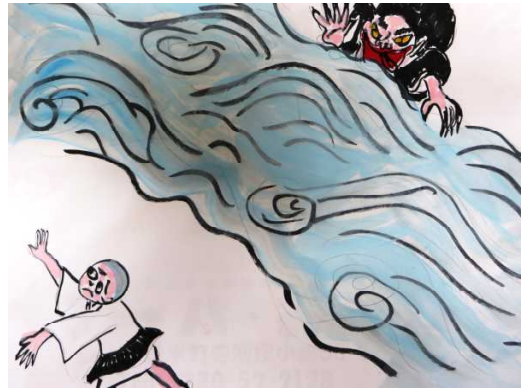
香林寺さ着いだどぎには、日もとつぷり暮れそうになつてだど。「おばんでございす。」つてお寺さ行つたど。そすたきや、和尚さんご飯食べでだど。「何だ、どっからきた。」「登米の養雲寺から、お手紙持ってまいりすた。」和尚さん立つてきて見たれば、とってもめんこい小僧なので、こいづ食つたらうまかんべと思つて、「日も暮れだす、空模様も悪いがら、今夜、泊まっていげ。」とすとんすを泊めることにしたんだど。夕ご飯ごつおになつて「さあ、寝ろ寝ろ。」つて、寝しえられだどしゃ。

そして、夜中になつたれば、ざあーざあーど、雨こ降つてきだど。そのお寺はぶっこれ寺だつたので、雨っこむつてきたんだど。すとんすの寝でだ枕元でさ、その雨っこむつてきて、「すとんす、すとんす。寝でだ和尚のつら見でみろ。」と言つてたように聞こえてきたのしゃー。不思議な音だなと思つて、次の部屋で寝ていだ和尚さんのつら、そつと見てみだど。すれば、口は耳までさげで、とってもおっかね顔すてだど。今にもすとんすは、食われそうな気がしたど。「こりゃ大変だ。なじよすて逃げだらよかんべ。」と、一生懸命考えだど。これは、便所さ行くふりして、逃げだほうがよかんべと思つて、「和尚さん、和尚さん。便所さ、行きだあござりす。」と言つたら、和尚さんは鎖を出してきて、小僧の腰さゆつつけで、「さあー、行ってこー。」と言つたど。

便所さ行つて、考えた小僧、大般若さんのお守りのごど思いついで、一枚出すて便所の柱さ、ぺたつと張つて「小僧、まだがつて聞かれたら、まあだだつて語つていただきます。」つてお願いすて、鎖を外して、便所の柱さゆつつけで逃げだど。小僧は、何の、逃げだど逃げだど。



和尚さんは、いつまでたっても出で来ねいがら、呼ばったど。「小僧、まだが一。」「まあだ一だ。」「小僧、まだが一。」「まあだ一だ。」「は一、面倒くさい。」って、鎖引いだれば、便所の柱ぬげで和尚の頭さごんごりとぶつかって、ひてえこびさ大きなこぶがでぎだど。そうすたっけや「小僧、逃げだが、残念だ。どごまでも行っただって逃がすがや一。小僧、まて一。」と飛ぶようにしておっかげで来たんだど。



小僧は振り返って見れば、かっつがれそうになったど。小僧はなんじょすっぺと思ってお守り一枚出すて「ここさ、おっきな川でぎろ。」と、投げだれば、そごさおっきな川がでぎだど。「なんのこしたな川など、なすてもね。」って、すっばすっばと飲み干してすまったど。「小僧、どごまで行っただって、逃がすがや一。」とまた追っかげで来たど。すとんすは、一生懸命逃げだど。



ほでも、まだかっつがれそうになったど。「さあ一、これは大変だ。あど一枚すかお守りねえどぎに、なじょすっぺや。」と考えだど。そすて、今度は「ここさ、大きな柴山でぎで、野火になれ一。」と投げだど。すたれば、そごさ、おっきなおっきな野火が出ぎで、さすがの化け物も焼け死んだらしくて、追っかけでこなぐなっただど。

小僧はようやく養雲寺さ帰ってきたど。和尚さんから「何だ、今頃、なして帰ってきた。」と言われたので、「赤生津の和尚さんハー、化け物の和尚さんで、危なく食われそうになったどご、大般若さんのお守りに頼んで、ようやく逃げけえりすた。逃げながら、野火出すてきたがら、それがらは、おっかけでまえりえん。」と話したど。

小僧の話聞いて、和尚さんはそれは大変だと、近所の若い人だづど、崖さ行ってみだっけ、大きな古むじな(たぬき)が、黒焦げになって死んでえだど。そすて、赤生津のお寺調べて見だっけ、客殿の下は、骨だらけだったのしゃ。

それからは、すとんすも知恵のある小僧と言われ、のちにえらい和尚さんになったど。それで、まんまん、おさまったど。



( 登米町誌・わたしたちの登米町から )